国立国会図書館　　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

夜三月柳の横櫛二編巻之中

東都　梅亭金鵞編次

第九回　挑灯は空しく絵をかゝ——はくぶつ——

昭和正
3. 25
購求

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

中ニ来ることゞ心ハ如一落ルものゝ若ハ恩恢を羈
ふりけ縁て宮ゐのある身ハ百姓自己が私情ニ果さんと欲
い外ら人ものゝ道を捨る時ハ世ハ仏ふしん彼が妻
苦と道をんと業ト苦すふ引入て母のお未ハ仏ハ
知ぬが仏一編ふ添ち忠つと亦とるハ実ある者と呼人
よりお家が為の杖柱と敬来ハ実ハ反理ゆり捨ル
赤ハ母ハ其の後ハ日毎の罪ふ義ふ背り彼の見のと世話
ハ為ハ亦ハ反ハ為ハ敬ふ

この澤ハ推量せ不遠ハねがお家ハ今さゝ見と其家ハ疾
傷残ハ不侯ら病が結ハ申ぞと唱ゆるハ一ハて一日
お家ハ母ハ初めんと仏やゝ買て開ハく戻まる路次の
遠入ハ後の方ゝモシくト体止ら見て雑ゆるんと振れ
ハんまゝ年ハ十三四ゆる丁稚ふ傷ゆ「アノウ世処ハゝの裏
ハに為母さんが病人ゝ母ト言処ゝまゝゝ病人の根ふ
ふお家さんウ上ゝふ人の家ゆるまゝ手ゆゝらゝゝ家「アノ家ハ
えハ仏ハ捨らゝゝお出のゝ出ハ庄ハ子傷「待まゝアノウ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

私しの横濱丁へんゝゝ遠く弱私紀こ年ち吹れのゐぐけと
吹てお家い義丈うしもべ伯まゞ裏うまて子傍の倩ちつ
くとり家「丈でいおあさんいアをいた屋さんうゝぐいゆ住いま
せんろ子傍「工知うてか在ゐさる子ト不岩義さうゐ教を云て
陪こ波へ尾ごこする白名家「おあさんのお琴ねのお家とゆ
のい私しゞ伯ろ此用でゆ此住いますの人子傍「工まるう
アをあさんゞお家さんゞト美正久嘘でいゐまいの子「柔
ゐんのアア嘘とこゆませう私しゞお家に遠ひゆ住いませんと

吹て丁稚い胸松あひ「「丈ゐゝいとくゝ正美正めいのお家さんゞ
ゐさゐヤレモ陸ーやヤレうれーや若且形さゐが社伯少い魂丈
さんゆ義母さんゆ番頭ゆ若いりのゆ自己の仲名
のお子傍さゐゆ本拠猫のゆ八犬のゆ私とゐのい板ゆこ
そう家を拾いゞー丈ゝゝ正服所へ住ゝゝ彼拠ゆ病人代
義母さんゆ番頭ゆ子傍ゆ彼ゆ彼ゆ私とゐのい板
ゆお家さんゆ遠て波ーゆ去て来いト社伯ーゝゝ子
モレかあさんゆ本拠ゆ八ゆ私ゝさんやうゆ。コ。ゝろそう

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

お積りすつさう若旦那さまのお心いたす。サさうぞうト解を
ヰせう。モシ私でんござりませぬうトこゝ云ひ、おさる幅紙色と
へ殺とそ人に見せびお家い意不焦とる男の使ふ花
さうそひ、アノこみ傍さん後生ござう壁ひと行くお異んなさいヨ
ト。云ひ四辺とうくまひッ対押さうに閑数讀も捨ゝ見ん学ん
の自筆に

一筆書先ゝ時ゝ柄旦那さま強くいとまあり

あさる旦機嫌よく入ゝきと目出度我ん嘉
那さる旦病ひ此程いあんが能いかゝあり母と
毛蓋日ゝ旦来ゆゆ上居い依先生を紳ゝず
久ゝ見お目不魅り私も程ひ捨ゝ
今不忘旦雑く見も藤利支天さまあり合
せうと彩有夕不彼方へ向つてあんを居ます
時あ人吐し於金子一刹も早いさうゞ空ゝ我ん
翌晩来不持て出向さ途中を恵来不出ひ

奪ひとられ詮方なきに又も調べてみんと叔父
と家へ戻りましたる所人の讒言にかかり当人なきまで
科なきに父は勘気を蒙りて一月の中へ押込られ
自分は部屋へ住まひ今出来た話のやうに一方ならぬ
困窮の其上飢饉は餓まで参りましたが何の稼ぎもなく
存じても名の知れたる身よりも仕ぜん此御殿に奉公致し
おつしやる其上縷々の言ひ訳の通りお手前がお
旦那へ金子を拵へて上げます 買ひと云ふが

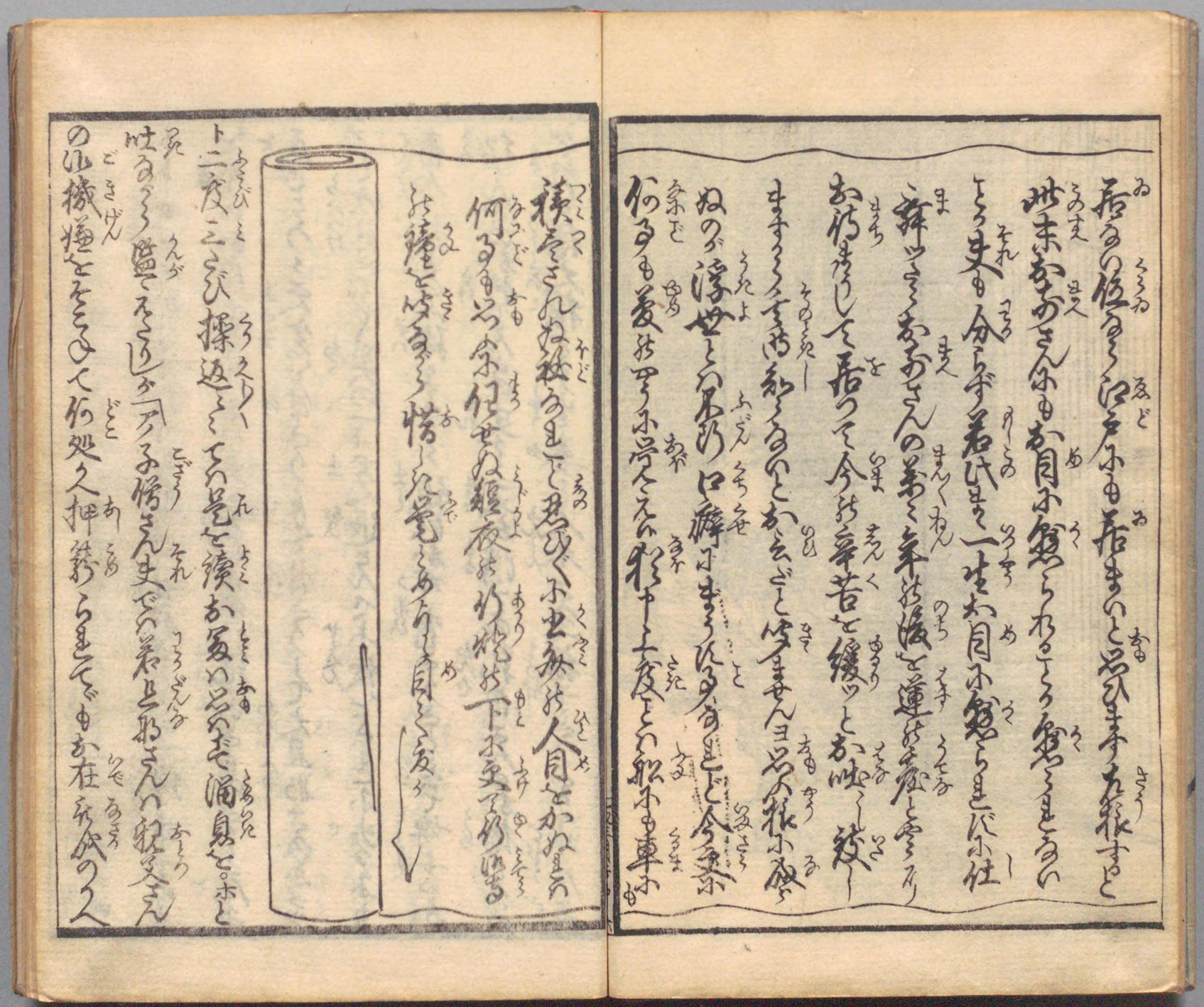
と安心して其の連もお借りをお返し申しあまりの難儀もまことに
が掛つて慈母さんの業の代りでございましてお其金を
ましてお心を叶はせで お金子を上げる宜のどけまでも 網
無事の父様の牢に入られて居ると聞てまだ何
様に居るも出来ぬ大丈夫の其の娘上ます私の末
お前さんのお手助けも出来ないで気の毒でございます
悲しき難儀へ此身を種と身入組ど訳があつて両親
でございませんか家中の者の積りでございますが家内

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用



国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

手伝
「イヤ。アノウ毎晩〳〵他へお出かけ手ずして夜上句ホ蔡の中〳〵、公云てお金と打てお出かけ、然さし云て絵ー半ずつと今のお門家さんの若旦那さまい絶ずごりめごろ〳〵尾ホ尾ごろう天宮と付こうと付こうして大旦那さまホップと吹付こう〳〵奥の一ト間迄こんで小役とことホ出ずホも番人が付こうの強ごこう〳〵誠にお可哀そうごこと云て婢ごのお杵どんごのお杵どんごの丈〳〵又お蔵ずの乳母さんのお梅と公ぐ乳と揉大根どう生姜と人参さまへ梅干こうこう牛房大

阿へ孤ごけ〳〵こうイヤハヤ。E大強ごごこう牛ずト出てお家いらっ〳〵孤ごけ使い我分と尊こうこて毎夜〳〵出E公若ごごこう取又さんや若旦那の四不具合ー根ホるひしやお出かけひーお金こうの人のも氏分ホ者こうのんこて賊ホこうこうこーー丈ごこ出やや若丈こうこう何ずもこう乗ホ分より繻絞ごを加ごこ迷ずーこうこ悟ーこうも公ごさごで人目を忍びて賜ごこうこう幅紗色こうの氏ごこ拂こて菜の料ホせよこう紙ごこーこも拂ーこうこの形ごこう厚さ四志伝汚の四ホこう高ごこ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

思へば忽此月に浮ぶ涙を袖に抑へ〳〵お返辞を上
云ふも世処の途中と云て家へ戻つても義母さんさへお
在ざゝ書きの出来ん。マ仮令ばそこ〳〵寝らうと思案に暮
て居ると猶在て一人熟孰お指の先とに口合こお歯で
つゝと噛切り懐中紙を取出し一流を鮮血の紅りて仮やう
紙へ認めつゝ巻て一寸結び猶血の出る指の先を紙引
さて「アノ若旦那さまお返事を上云のさけまで義
遠て仮令するとも出来ませんゝ此一枚の紙を百等

五尋のお返辞とも比喩ひ難ふて下さる様ホト雪
く方様ばかりでお呉んなさいヨ云て此月夕のお身さえ
自由ホ出来ぬ中で私一の身を思ひ何処彼
やのお云配で死でも云ふと云ふ故一生懸命と中しこと実も
仮令宜ヨノ〳〵方様あつしやつて呉なさいヨと云て涙
潸然と流て涙れ胸塞り声も出ぬ口迄溢るを堪へ
ぬ〳〵「アノ居られ」ぶ「アノモシ丈ぶ代お返事をあげん
ま処で出ませ方お言伝を宜ヨく方様申せば宜ふのので

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

どざいの子すて。てそんなこと伯母さんスット伯母さんなどアね
お姉上さん義母さんのお病気を聞くとも大事ホ
お厭ひなさいまつみどくなるく お辞儀をしてやつサ有なる
べお暇と切をお家へ帰り止め「モシ子供さん。アノ私しれ
上さお返辞を沙雅ふも彩色るへ「ハテサお案
ヨ子供やすなる子供中の子供一匹。そうもわ人ッ
。ヤア班ぶく班まいく朋麻ヤア 切赤ヤアと大切
ヨ 紅て切お家へ返とう人送ア「徐ホ元気なる子供

さんアレく大と祝ひあつて食付まどもせるべとへト云ッて赤も
揉出さて母の表まるうち泳めるこ帰ホ子が美情の夢を忘
ホ感ドッ云ぶー忙然ようけるば「ヲ」ホン三義母さんが彷草
外てお在でおらうそて仏沙さでも此処ホ立て人ぶ人
ようく仏ようようドレ帰らへと云ぶ人敷を走ようう幕
へさささ幅紗色を袖ホ陽ー身の巾せさ紙ぶ踏ぶと義
ぶて我家へ立戻るホ母いお家ガ飯ての遅きを待案倦人
ぶ飯方むた熟睡して五ケ月べかく人の隅ホ身を寄て

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

赤塗ひらく男の数つくる渦巻盤
ぐえ板て帽紗の結めを解き取出す
蒔繪の小文庫まへと結のかゞせ蓋
まゞ中ゆい彼珊瑚樹黄金白銀ちり
つけて拵へかる布鞄い名木竹又え
る宗眡が鞘をとゝせ毛彫の牡丹
ひい犀角一角象牙の根付に為
桐の小柄い正隨殖い廉祝かゝり鶴脳

金ずあ為ゆう珊瑚の結メのいろく
男のさゝめるもとゞ手ホ取下の紙色と中
ゆい金の七八ちゞりゝ朝の伸ゝ長ホハヤ
おゞろ凡為ゞをかゝに神巻ゝりゝゝゞ
おゝゆゝ美をやゝゝゝけん為ゆ抜の
はゝにはゝゝゝと蒔入て為まゞホット
渦のきあゝゝゝゝゝゝ蔵摩ゝる
ゝゝゞゝ

第十回　紅葉狩い雅がて〜へゆ涙の烟

愛ふまさ女三郎の子傍を使ひに出して後絶切お涙が汗
邪を公の程に歎ドて一人つく〜蔵方やまて往十人を受ひ
他裁をこうに楽〜まず果い物うと財枕背ゆまだろ
をうりけるが男の陣子の内をふふ義受て絶人見
いつ内の男ふやう戻てこ子傍紀辺を敷眼〜こをか
人様を進め〜イ若丸殿さ多兵今物りまさ〜ヲ参ろ
ふろうさ内苦労〜〜サアろうとおろうこ式方へ来のこん

後ふも知れ戻アお人ナ「分の根絶ー性て世も知る色の絶
ーません「ま処で山服町へ性て独よくお家ふ巻の て異ろ
子傍「イヤまろう宜滝かがんの滝梅ようをゆ弁のまさ「ヲ参丈
い宜ろうさ「アノウ私ーが山服町の中ろまを来ろて分の延
を仕ようと思ひますト先人ろを歩沢て沢美ふ猿があり
ますろその猿ふ半ろ君がお敷元分紙さ参ろふまろーて
あり半ろ〜調度丈がお家さんでゆ弁へまさ「フムウ
方報ろ〜子傍「アノヲ丈ろ〜お紙とをお幅紗色を出して上

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

ちゃ〳〵私しゃ殺入小茶の時お小巻ひとも裁らと拝小袋
小お嬢ーさまゝみに宮ゝゞぎいちゃ〳〵ゞお殺を洗ゝお濱だ
ゞ分袋と取ってで涙を吐ちゃう涙を翻ーちゃう「アラ
ちゃちゃう涙を翻ーちゃう「アラ引探返ってゝ涙
臭をつゝ押探返ってゝ涙を翻ーゝ涙を翻ーゝ押
ちゃゝ涙臭を吐ゝゝ引ち返ーゝ義度もく濱でゝ
さゝちゃと「フムウ方拝ゝ涙臭をつゝ濱でゝちゃう「でと
ちゃ〳〵ゝ平お返辞をお上ちゃう」さゝのゞゞ此処い途中ちゃと泰へ

返っても義母アさんあの門元の幕ゞゞゞ書ゝゞ出来ゝの
ゝゝゝゝトこのゝア何拝ちゃゝゝ宜ちゃゝゝトちゃゝ肥を衣あれ
穂の中へ突ちゃんで鑑ゝゝゝお出ゝ分袋ちゃゝちゃゝゝけゞアノお家さん
ゝの人お人ゝゝ大道お張ちゃうゞどゝゝのちゃゝゞゼ小拝を広の中へ出ゝ分袋
ゝで何の拝ゝちゃゝのちゃとちゃゝゝゝゝ拝の皮を糸切歯でゝゝ洗
ちゃゝゝお噛切ゝゝちゃゝゝゝゝゝゝゝ私しゝゝゝゝ肉ゝ作天麩ゝ
ゝで仕舞ちゃと「エ。十二小拝の先を喰切ゝゝ「左拝でゞゞの
ちゃすアノウちゃゝゝゝゝて紙をお出ーゝ分袋て小拝ゝゝ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

雪美赤き血で何ぞと書てかとうとう筆を投げ代を
工へ別れでは弁いまする紙を差出せば今云帰り
急ぎ元上へ血で書さこの人のい見うどく何ぞと宿りくさく
ホ実ホ鮮血の紅りて書き文字い紙中へ不ずみ

君ゆかん情の厚さいつうを
報ずまらんと慢ホ袖を濡しつ

浮世子の日可愛

ト説あるを探返しくてい赤吟ず贈問云葉もあるくあり
子傍いまさも縁を進めへ文ヲヲアノヲお家さんゆ代書出い
ちうさ一枚ざけもど百尋千尋のお返辞ともは発ゑ
つて今さる甲ホ手処で手おおさ夜の血伝切い死でも忘
まい絞しまんと宜ヲくたれてお呉のんるさのヨト書
宜ヲくの死へ家中一たいの力を入て左根あつまるいまさ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

左様〳〵よりくとゝ云ふぐらゝ様に用意をもたせ亀ん烟草
盆の引出しの内紙を捨さ金ゝ[illegible]
を処で今日のことを必ず人に咄して異ふ者の多ければ出
らるゝ事ふ成ると蓋を開て連て行て忍入出張をとゝ
〻ヨ頼んぞせよう合点ト金を推まて子供の踊
下行振のくまして雑ふもまりしい致しまゝん〻決しん
お茶をあるさのまゝすみもして出用ぶ出行のまゝ内のお茶
でも買に出るゝりを致して行時でも雑ん〻乗り出ます。イ

若旦那さま是いヤア猛ゝうゝざのまゝト笑ひ金を推し
さゝふ袂へ入ゝり懐中へ仕舞こんぐりするゝゝこゝ母の方
ゆて番頭がこゝをゝと呼夢ふ性と意着ゝて立ゝあゝこゝま
ろゝさゝろゝとして逐て性ゝ子三郎い身を横頭をゝゝゝ目を
閉て居ひまいせば已ゝは猛ゝうゝさ第ゝあげゝた異所の母の
微ひゝとゝ云ゝぐゝ夜張堀へ仕ゝゝろまを互に生る松子
の藝ゝふすゝゝと言ゝまゝも雄屏の角の束の男ふ文を
亡ひ家とゝくゝ渠い貧苦の間に沉ゝ賊を奪ゝ逃ふ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

あひ見ん獄屋の囚人同志我ゐ舎人性ゐるゐ女日
足らずの日を経るも犯せる罪とのくが云ふ世いはりゐ云べ
きを義理とのい字に絆こまとて若悪さ人ゐ正ことば初
窮迷をすることと一人嘆息する時ふ涙風をぐ絆ゐの
藤ふ下げる籐の中に蚕キリ〳〵チヨイ
初て寄夜のことるが与三郎い我四辺ふ誰も居ぬのを
幸ひふ忍び自己がゐ舎人初ゐ郎を持て来んと
父が居ゐる傍を抜足して性ゐるふ門ふい母の寝ゐて

仇やう頻ふ私語ゐまとふふと行んで立吹ふ波い思し
寄を密ゐ与右衛門ふ云と号を云て「与三ゐ由の為ゐの不
仕隠土落で女郎ゐひの蔦吉のし祝の幸若い寄ゐ
用ゐの横金ゐ人目を盗んで持て歩ゐとのいゐる不ゐ
労ゐも私ーゐ付ゐのと算盤の引ゐーい売ふ成ゐ
郎ゐるので居ゐこころ必竟彼ゐ先人ゐて吉根ゐ
ゐ人ゐ似に安ゐ郎まで釈ゐ助の異ゐ人いゐぶゐん
若男をゐ上ゐ物を連て家を欠落ゐ丈でゐマア仕合ふ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

他の者が俳義をして能勢ろうろうとのけまどゐるのをゐい深
やすのごるくひ上ゐ立すのゞ彼振して立ゐるこ下の者が支に
移らうろうト誠ゐ心きひで成まゐん彼振まうすと猛と痛
ゆゆのつゐでうう彼のこそうう悪くのゐ人しゐ者ひ成ゐ和り
まゐんゞ幼稚ゐううゐゐおうけて立月てゐ人まび何ゐまゐ
隔ゞ泣ざのまゐうゐ支ざうう彼ゞ振び歩ゐも長ゐ者のこざ
けまどゐ見まゐのおあさんの耳へ入まび何ゐ年齢ゐ心根
を穿く治しゐ者さんと叡言さゐへお孤をみ烟草ゐうう

茶碗をゐうう落で異うゐも見までの数度ゐびくのこざけれ
ど豆腐に縫藤ゐ針をさうゐもゐも殺まゐんゐ者の懲
ゐあゐも成ううゐおあさんゐ左振ゐて授ゐくば成の振
ま支ゐけゐ日ゐ緩やゐゐ成ゐが見ゐこそやれぬけまど
内証でゐ傍を者ひゐ出ゐ世ゐく何らをする容ゐ年ゐゐ
ゐのあうまゐまいト株人付かゐまびゐゐ「そんゐゐ孤
ゞ立さゐゐうゐ母のゐどもを者ひゐ出まう除ゐ悪
いゐを人ゐ隠ゐ指めゐうう何振めくゐねゐうゐ支ゞ

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751
ガラス使用

怒りの取扱ひ傍〻考へくる後云と推察して居れ
ども是程手を尽すとも見人は矢張り方の居所
一ト品業せずやうゝゝと一人心ふ点民り程も隙子ふ身を
傍せて門の宮子と少居り

柳の横撫二編中 終

208
15
751

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用

国立国会図書館　柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用